



昭和六年度調査

優良國産品調査書 (第四回)

愛知國産振興會

## 趣 意 書

我邦刻下の状態は、國産の振興と共に依り、我が産業の基礎を確立すると共に國際貸借の關係を改善するを以て、焦眉の急務とする事は、何人も異議のない所でもあります。

本會は此秋に當り、政府及官公私各方面の諸機關、並各府縣に於ける國産振興會と連絡提携して、我國産品の研究調査を遂げ、其の改良發達の方策を講じ、優良品の愛用を奨励し、而して産業の發展と貿易の振興とに資し、併せて國防上並に社會問題の解決に寄與し、以て國産の振興と國力の充實とに貢獻せん事を期するものであります。

大正十五年九月

### 愛 知 國 産 振 興 會

## 第四回優良國産品調査書刊行に就て

一、我が愛知國産振興會は事業の一として、昭和二年度より引續き輸入防遏、並輸出振興に關する縣下優良國産品の調査を爲し、既に第三回に亘つて、之を發表し、昭和六年度に於ては第四回として、左記事項に付調査しました。

機 械 工 業 鑄 造 製 品

化 學 工 業 轉寫紙、陶器、人造研研砥、ゴム製品、石鹼  
業 織 工 業 絹織物、人絹織物、小供服地、ワイシャツ地

一、右調査委員は左記各位に委屬しました。

委 員 長 名古屋高等工業學校長 森 彦 三  
機 械 工 業 部 委員(部長) 名古屋高等工業學校機械科長 伊 藤 萬 太 郎  
名古屋高等工業學校教授 松 良 正 一

同 委員 名古屋高等工業學校教授 松 良 正 一  
化學 工業 部 委員(部長) 愛知縣工業學校教授 貫 名 基  
愛知縣工業試驗場長 朝 比 奈 兎 十

染織工業部

委員(部長)

委員

同  
同  
同

常 津 岡 器 學 校 長  
愛 知 醫 科 大 學 教 授  
名 古 屋 高 等 商 業 學 校 教 授  
愛 知 縣 工 業 試 驗 場 技 師  
野 口 清  
永 塚 榮 治  
北 村 一 郎  
小 原 龜 太 郎  
巖 谷 一

愛 知 縣 工 業 學 校 長  
名 古 屋 高 等 工 業 學 校 紡 織 科 長  
愛 知 縣 商 工 課 技 師  
三 河 染 織 試 驗 場 長  
齋 藤 吉 廣  
築 源 次 郎  
稻 澤 作 之 助  
小 栗 退 治

一、調査の品目は各部毎に第一回より通番として記載しました。從來調査した品目並推奨優良品製造工場は、參考として本調査書の末尾に參考として附記致しました。  
一、本印刷物は従來同様、廣く諸官衙、學校、圖書館及關係諸工業方面に頒布して、本縣優良國産品を推奨宣傳すると共に、國産振興の實を掲ぐる上に、諸産の御協力を希ふ次第であります。

第四回優良國産品調査書目次

〔一〕 機械工業之部

(九) 鑄物

- 一、自家製品用鑄物鑄造工場の推奨……………一
- 二、一般鑄造業者の推奨……………二
- 三、鍋、釜鑄造業者……………六
- 四、桑名地方鑄物工業の現況……………七
- 五、結 論……………九

〔二〕 化學工業之部

(七) 石 鹼

- 一、本邦に於ける石鹼製造業の沿革及現況……………〇
- 二、愛知縣に於ける石鹼製造業の沿革……………〇
- 三、愛知縣に於ける石鹼製造業の現在及將來……………五
- 四、縣下優良品製造業者の推奨並其の概況……………五

(八) 護 謨 製 品

- 一、本邦に於ける護謨工業の沿革及現況……………一九
- 二、愛知縣に於ける護謨工業の沿革……………二〇
- 三、愛知縣に於ける護謨工業の現在及將來……………二五
- 四、縣下優良品製造業者の推奨並其の概況……………二六

(九) 石 版 轉 寫 紙

- 一、石版轉寫紙工業の沿革……………三〇
- 二、同最近五ヶ年間の狀況……………三一
- 三、同最近五ヶ年間の狀況……………三二
- 四、縣下優良品製造業者の推奨並其の概況……………三三

(三) 陶 齒

- (一) 一、本邦陶齒製造業の沿革及現況……………三六
- 二、本縣陶齒製造業の現況……………三七
- (二) 一、本縣人造研磨砥製造業の現況……………三九
- 二、本縣人造研磨砥……………三九

[三] 染 織 工 業 之 部

(一) 絹 織 物

- 一、本邦絹織物生産狀況……………四一
- 二、本縣絹織物生産狀況……………四九
- 三、縣下優良品製造工場の推奨……………五三

(二) 人 絹 織 物

- 一、本邦人絹織物生産狀況……………五四
- 二、本縣人絹織物生産現況……………六一
- 三、縣下に於ける主なる人絹織物及交織物製造工場……………六四

(三) 兒 服 地 及 ワ イ シ ャ ツ 地

- 一、兒服地及ワイシャツ地概観……………六四
- 二、本縣下に於ける斯業の狀況……………六六
- 三、縣下に於ける主なる兒服地及ワイシャツ地製造工場……………六七

參 考

- 第一回推奨優良品目及其の製造業者……………六八



第二回推獎優良品目及其の製造業者……………七二  
 第三回推獎優良品目及其の製造業者……………七五  
 愛知國產振興會規約、役員……………八〇

〔一〕 機械工業之部

(九) 鑄 物

本縣に於ける鑄造品の現況を見るには大體次の如く自家製品用鑄造工場、一般鑄造業者、鋸鋸鑄造業者の三ツに區分するを便とす。

一、自家製品用鑄物鑄造工場の推獎  
 優良品製造工場として推獎すべきものは左の如し。

工場名	所在	職工數	製品種類	年度額(昭和五年度)
日本車輛製造株式會社	名古屋市瑞穂田	一〇八	鑄鋼	一,一〇〇
株式會社豊田自動鐵機製作所	碧海郡刈谷町	一〇〇	鑄鐵鋸金其他	一,四〇〇
豊田式鐵機株式會社	名古屋市西區島崎町	一四四	鑄鐵	三,九七〇
同上	西春日赤部稻用町	五二	鑄鐵	三,七〇〇
計		四〇二		一七,六〇〇

二、一般鑄造業者の推奨

優良製造工場として特筆推奨す可きもの左の如し。

工場名	所在	職工数	製品種類	年度(昭和五年度)
大同電氣製鋼所	名古屋市南区熱田	四〇〇	製鋼 鑄鋼 鍛鋼 合金 延鋼	一一〇〇〇 一、〇〇〇 一、〇〇〇 六〇〇 四、〇〇〇

本工場は大正五年の創立に係り、電氣製鋼業者として成功せる最も古き工場なり。近來電氣鑄鋼作業の著しき進歩と共に多数の同業者を生じ、殊に最近需要の減退と價格の低下に伴ふ競争激甚なるが本工場が其生命たる電力購入費比較的安きと作業の技術に於て一日の長あるが他に比し利する所なり。  
其他之に屬するものは概して其規模小なるが、其中にて左記八工場は製品相當優良にして生産數量も稍大なり。

工場名	所在	職工数	製品種類	年度(昭和五年度)
久保田長太郎	名古屋市西区見玉町	四〇	機械部分品	七五〇
木村勲次郎	東區上飯田町	一五	同	六七〇

尚右以外の工場にして産額甚だ少なけれども參考として舉ぐれば左の如し。

工場名	所在	職工数	製品種類	年度(昭和五年度)
伊藤吉三郎	南區迫野町	一八	同	六七〇
江崎岩吉	南區津下町	二七	同	六〇〇
伊藤忠留吉	中區御幸所町	二五	同	五八〇
伊藤忠次郎	中區西日笠町	二三	同	五〇〇
大須賀源次郎	南區熱田町	二五	同	四〇〇
櫻井製鋼所	中區御幸所町	二五	可鍛鋳鐵	四〇〇
計		一九八		四五七〇

工場名	所在	職工数	製品種類	年度(昭和五年度)
村瀬久次	名古屋市中區名谷町	一八	機械部分品	三三〇
伊藤庄太郎	南區熱田町	一六	赤戸ランプ	三〇〇
藤本三郎	中區御幸所町	一五	同	二七〇
河本萬造	東區布造町	二〇	紡織機	二六〇
島嘉藏	南區熱田町	一〇	機械部分品	二六〇
深川田中合名會社	東區水筒先町	二〇	同	二二五

川竹澤十郎	名古屋市東區栄米町	五	機械部分品	二二五
伊藤逸太郎	南區伊勢米町	一七	非戸ギンズ	二二五
渡邊末松	中區御器所町	八	機械部分品	一九〇
伊藤平之助	中區数田町	一四	同	一七〇
有竹きせ	南區繼田町	九	同	一七〇
長谷川宗太郎	中區廣益町	二〇	同	一五〇
羽佐田太郎	中區御器所町	一一	同	一三五
高木なか	中區業場町	一五	機械部分品	一三〇
杉戸桑次郎	中區西日笠町	一〇	同	一一〇
鬼頭錦吉	南區梅田町	一一	同	一一〇
川口甚市	中區五木町	六	同	一〇五
矢野平次郎	中區業場町	一一	同	一〇五
三輪忠一	中區梅田町	六	同	一〇五
伊藤五之助	中區西川端町	三	同	一〇五
羽佐田賢司	中區大井町	五	同	一〇〇

服部吉太郎	南區数田町	一四	可鍛鋳鐵	一〇〇
計	七二	五九四		八〇二六
其他年産三歳以下のもの	五〇	三三八		四、三二

尚鋼鐵及砲金専門の鑄物工場としては左の如く何れも設備小にして技術も甚だ幼稚なり。特に推奨すべきものなし。

工場名	所在	職工数	製品種類	年産額(昭和五年度)
山森岡太郎	名古屋市中區長坂町	一五	機械部分品	三、七〇
廣瀬九男吉	南區新庄須	一	同	一九
平川忠次郎	中區東古渡町	一五	同	一八
中川勝次郎	南區西古渡町	一	同	一四
岡田演次郎	中區業場町	二	同	一四
松谷伊三郎	南區澤下町	四	同	一一
北村伊三郎	中區御器所町	七	同	一〇
浦野直太郎	中區東川端町	三	同	一〇
此外小工場		一七	同	二七

三、鍋釜鑄造業者

鍋釜の鑄造は本縣には相當古くも操業せられ居たるものにして、其製品は全國的に販路を有す。然れども近時「アルミニウム」製の鍋釜が使用せらるゝに至り、其製造高は年々減少する状態にあり。左記四工場は製品相當優良なり。

工場名	所在地	職工数	年産額(噸數)
水野鑄造合名會社	名古屋市東區上飯田町	一〇	七五〇,〇〇〇
服部鑄造株式會社	岡崎市利根町	九四	七五〇,〇〇〇
中尾十郎	實數郡豊川町	七〇	四五〇,〇〇〇
伊藤商店平坂工場	幡豆郡平坂町	三二	一四五〇,〇〇〇

前尾三濃鑄物鍋釜同業組合員中にて本縣に屬し操業中のものを擧ぐれば左の如し。

工場名	所在地	職工数	年産額(噸數)
水野利秋	市外西批登島町	八	七六,〇〇〇
小島延次郎	豊海郡明治村	一〇	四〇,〇〇〇
松崎長之助	幡豆郡平坂町	一三	七五,〇〇〇

鍋釜鑄物平均一個貳拾錢として製品價格三七一,〇〇〇圓なり。一噸一三〇圓と推定して鑄造年産重量二、八五〇噸に相當す。

四、桑名地方鑄物工業の現況(日用品の部品、所謂數物類)

本縣内に機械工業に使用せらるゝ鑄造鑄物は縣内生産以外に三重縣桑名町及其附近の鑄造業者より供給せらるゝもの年額一五、〇〇〇噸あり。之は同地方が工賃低く且つ小物の鑄物に特種の技術を有する爲め安値なる製品を提供するに依るものなり。

次に桑名附近に於ける鑄造工場の状態を擧ぐれば左の如し。

工場名	所在地	職工数	製品名	年産額(噸)
山本商店鑄造部	桑名町船場	九〇	踏機板、アイロン	八〇〇
辻内鑄造所	桑名郡在良村	七〇	電気用踏機板	八〇〇



普通鑄物平均價格一噸ニ付八五—九〇圓

大橋鐵工所	桑名町西桑名	六〇	アイロノストリア	四〇〇
富田伊之吉	桑名町緒屋	四〇	小輪ストリア其他	七〇〇
伊藤邦次郎	桑名郡藤生村	三五	瓦斯器具日用品	六〇〇
竹中三郎	同	二〇	軸承類	四〇〇
中山則太郎	同	二〇	調車器具	六〇〇
京洋鑄物製作所	桑名町内堀	二五	ヨロロ日用品	五〇〇
加藤菊次郎	桑名町田町	三五	諸機械建築物	四〇〇
協和鑄造所	桑名町内堀	三〇	ストリア七輪其他	五〇〇
合資會社三共組	桑名郡商新直	三五	マルエーアル	五〇〇
後藤金太郎	西桑名町桑名	二〇	アイロン	二五〇
伊藤増次郎	桑名郡藤生村	二〇	農具	四五〇
外名鑄造所	桑名町内堀	一六	建築物	四〇〇
外工場數	二〇	七一六	約三〇〇〇	一〇,三〇〇

五、結 論

鑄鋼、鑄鐵、真鍮及砲金の鑄造は全部國內に於て行はれ、外國品の輸入殆どなし。又其原料たる鉄は鞍山、本溪湖、兼二浦、輪西寺等の國産品を主として使用し、銅は勿論内地産なり錫及亞鉛は外國品を使用するも止むを得ざることゝす。右の如く鑄造品に對しては自給自足の域にありと雖之が材質の改良進歩に對しては尙研究すべき點多々あり。即ち製品の多くは外形を整へるも最も重要なべき内部的強度、硬度等に對しては未だ優良なるものと云ひ得ざるもあり。又鑄造業者の多數が小工場にして製品の安價なる事をのみ願ひ品質の改良研究を計ることを得ざるは甚だ遺憾とする所なり。

## 〔二〕 化學工業之部

### (七) 石 鹼

一、本邦に於ける石鹼製造業の沿革及現況

石鹼の初めて我國に渡來したるは恐らく織田・豊臣時代にして徳川時代には既に相當輸入せられかなり周知のものなりし如くなれども、其の製造を見るに到りたるは明治維新前後の事なり。明治四年には東京、大阪に雏形を成せる工場建設せられ、其の後諸技術の輸入盛となるに伴ひ、斯業も漸く確立して同十年頃には京濱間に八工場を數ふるに到りたり。以來日清、日露兩役を経て次第に發達し、更に世界大戰に際會して急激なる發展を遂げたり。即ち大正八年には年産額二千五百七十餘萬圓にして、實に戰前の五倍に相當す。其の後益々健實なる發達を續け、昭和四年には生産額三千八百九十餘萬圓に上り、内輸出百六十餘萬圓にして輸入は僅かに二十萬圓に過ぎざるが如き状態となれり。

二、愛知縣に於ける石鹼製造業の沿革

本縣に於ける石鹼製造業は既に明治の初年に其の端を發せり。即ち明治十一年石塚元行は失職舊海士救済の目的を以て名古屋市東郊山に東京獸類化學製造所の支店を設立し、弊牛馬の廢物

利用に従ひしが、後石鹼製造を志し同十三年名古屋市東外堀町に株式會社化學組石鹼製造所を設立せり。其の間愛知縣に於ても保護獎勵に盡すところあり。漸次順調なる發展を遂げたるものなり。同所は其の後石塚石鹼製造所と改稱して以て今日に至る。一方明治二十四五年頃に名古屋市に加藤石鹼製造所及愛知石鹼會社の設立を見たり。斯の如く本縣に於ける石鹼製造業は其の起源甚だ古しと雖も東西兩大生産地の中間に位し地勢上不利なるため、其の後の發達は寧ろ遅々たるものなりしが歐洲大戰に際し、本邦斯業の發展に伴ひ本縣に於ても東亞石鹼株式會社（現在の旭電化石鹼工場の前身）名芳社共の他の大小工場相次いで起り、其の儘今日に及べるものなり。

#### イ、原 料

石鹼製造の主要なる原料は油脂（牛脂、椰子油、硬化油、綿質油、カボック油等、粉末洗濯石鹼には醬油の油、溜油等をも使用す）及苛性ソーダなり。洗濯石鹼にはこの他に樹脂を使用し安價なるものにては硫酸ソーダを加ふるものあり。

軋下工場に於て使用せらるゝ此等原料の産地及凡その價格は左の如し。

原料名	産 地	CO <sub>2</sub> 法の價格 (昭和六年六月製)
牛 脂	淡 洲	100.00
椰 子 油	南 洋	118.00
硬 化 油	内 地	190.00
溜 油	内 地、朝鮮、支那	113.00

カゼンツ油 南洋  
 醬油の油 關東地方  
 桐油 關下  
 苛性ソーダ 本國  
 硫酸ソーダ 内地  
 二一〇〇  
 二二〇〇  
 一〇〇〇  
 一三〇〇  
 一六五〇  
 九五〇

右の中外國産のものは横濱、神戸、大阪等の商人の手を経て購入す。此の他鹽析用に使用せらるゝ食鹽は主として青島鹽にしてその價格一萬斤につき三〇三圓前後（交附金を控除したる正味價格は一一〇圓前後）なり。

尙化粧石鹼の香料は其の種類極めて多數なれども普通に使用せらるゝもの、中高價なるものは一貯二〇圓位安價なるものにては二二三圓程度なり。

ロ、製品の種類及品質

本縣にて生産する石鹼の種類は化粧石鹼、洗濯石鹼、粉末洗濯石鹼、工業用石鹼等にして、昭和四年に於て其の産額の最大なるは、洗濯石鹼の五九・二%次が化粧石鹼の四〇・七%にして工業用石鹼は〇・二%に過ぎず。

本縣産石鹼の代表的なるもの分析成績左の如し。

水	北群用石鹼一	化粧用石鹼二	洗濯用石鹼	粉末洗濯石鹼
分	八〇〇 <sub>5</sub>	八八九 <sub>5</sub>	一四、四五 <sub>5</sub>	一八八、五 <sub>5</sub>

總脂肪	八二・七三	七八〇・六	六〇八・六	三四・三九
遊離脂肪	Q一七	〇・三三	〇・三三	〇・三三
不飽和物	Q一七	〇・七六	一・一〇	〇・四四
總アルカリ	九・九二	九・四九	九・三三	二四・八七
化合アルカリ	九・八八	九・四八	八・九七	三三・三九
食鹽	Q一三七	〇・八〇	Q・七四	〇・三五
ナリモリオン	二、四三	二、九五	七、七六	二、五〇
灰分	—	一〇、一〇	一〇、九〇	三四・七六

ハ、販路

製品の仕向地は内地、臺灣、朝鮮等國內全般にわたる。而して輸出は未だ少額に過ぎず。

ニ、生産費

生産費は各工場の組織製品の種類等により一定せざれども大體に於て製品價格に對する割合左の範圍にあり。

原料代 七〇—七五%  
 工賃 五—一〇  
 間接費 一八—二〇  
 間接費内譯

電力代  
燃料費  
其他

〇六一・一七  
〇六一・二二  
一六一・一八

ホ、縣下に於ける最近五ヶ年間の状況

縣下に於ける最近五ヶ年間の生産數量、價格、工場數並に職工數左の如し。(愛知縣統計書による)

年次	大正十四年		昭和元年		同 二年		同 三年		同 四年	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格
化粧用石鹼	三三二、二六九	三五九、〇三三	五三一、九三三	五六八、六九七	五九八、二二〇	六九八、二二〇	七〇九、〇〇〇	七〇九、〇〇〇	七〇九、〇〇〇	七〇九、〇〇〇
工業用石鹼	二二、四六〇	二六、一六二	二二、〇九〇	二四、八九〇	二二、四〇〇	二二、四〇〇	二二、四〇〇	二二、四〇〇	二二、四〇〇	二二、四〇〇
其諸用石鹼	七二、七九四	七五五、二二一	七二、四四四	八三三、二六六	六九八、八二六	六九八、八二六	六九八、八二六	六九八、八二六	六九八、八二六	六九八、八二六
價 格 合 計	一、一三三、一七〇	一、二六六、六六六	一、二八六、三五六	一、三五九、八二七	一、二八二、〇九四	一、二八二、〇九四	一、二八二、〇九四	一、二八二、〇九四	一、二八二、〇九四	一、二八二、〇九四
職 工 數	一一二	一一三	一一三	一一四	一一五	一一七	一一八	一一九	一二〇	一二一

昭和四年に於ては本邦生産額の約二八%に相當す。

### 三、愛知縣に於ける石鹼製造業の現在及將來

本縣に於ける石鹼製造業發展の過程を辿るに、大正九年以來昭和四年に至る迄製造工場數、職工數從て生産物の數量價格に於て漸進的なりと雖も増加の傾向を示すものにして、由來本縣石鹼製造業は世界大戰後の財界好況の結果として急激なる發展を遂げたものにして其後財界不況と共に又漸次衰微を示すべきものなり。然るに斯の如く進展の跡を示すのみならず、石鹼品質又製造工場施設のついて之れを見るも昔日の面影を止めざるものあり。これ一名古屋市を中心とする愛知縣産業の著しき發展の賜とせざるべからず。然れども名古屋市の如き大正十一年大都市計畫實施の際に於て六十餘萬の人口を有せるもの今や百萬を突破するに至りたるものあり。かゝる急激なる人口の増加に比例して日用品なる、從つて人口と共に其の生産額も亦増加すべき筈なる石鹼業の發展運々たるは他府縣より移入石鹼の額甚だ多きを物語るものにして、同時に本縣斯業將來の發展の有望なるを示すものなり。更に一考すれば本縣産石鹼の品質は其の價格に比して多少遺憾なる點なき能はざるものありと同時に斯業の經濟規模小に從つて其の方法幼稚にして大資本を擁せる大工場との競争に堪へざる等の理由は本縣斯業の發展を遅々たらしめたるものならん。以上の諸點を改良し更に地方的需要の趨勢を察しよくこれに適合するものを生産するに於ては本縣斯業の發達期して待つべきものあらん。

### 四、縣下優良品製造者の推奨並に其の概況

縣下に於ける石鹼製造業者中優良品製造者として推奨すべきもの左の如し。



名古屋市中區西塚町一五番地 旭電化工業株式會社名古屋石鹼工場  
 同 東區水筒先町二丁目八、九番地 合名會社石塚石鹼製造所

旭電化工業株式會社名古屋石鹼工場

製造者名 名古屋市中區西塚町一五番地

社長 鈴木市之助

資本金 二〇〇萬圓(本社資本金)

沿革 大正十三年六月東亞石鹼株式會社(大正八年創立)の事業を繼承して今日に至る。  
 製品の種類及最近五ヶ年間に於ける生産數量價格

年次	製品種類		昭和元年		同二年		同三年	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格
純鹼	150,000	2,500,000	118,000	1,800,000	140,000	2,200,000	160,000	2,400,000
	60,000	900,000	113,000	1,700,000	140,000	2,200,000	160,000	2,400,000
洗滌石鹼	70,000	1,000,000	120,000	1,600,000	150,000	2,100,000	170,000	2,300,000
	100,000	1,400,000	130,000	1,800,000	160,000	2,400,000	180,000	2,600,000
其他	80,000	1,100,000	130,000	1,800,000	160,000	2,400,000	180,000	2,600,000
	120,000	1,600,000	150,000	2,100,000	180,000	2,700,000	200,000	3,000,000
合計	330,000	4,500,000	378,000	5,300,000	450,000	6,300,000	520,000	7,400,000

年次	敷地、建物		同四年		同五年	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格
敷地	143,500	1,090,000	143,500	1,090,000	143,500	1,090,000
	84,700	4,550,000	84,700	4,550,000	84,700	4,550,000
建物	110,000	1,100,000	110,000	1,100,000	110,000	1,100,000
	134,350	1,343,500	134,350	1,343,500	134,350	1,343,500
合計	368,550	3,983,500	368,550	3,983,500	368,550	3,983,500

敷地、建物

敷地 七三二坪

建物 四三九坪

従業員

職員 六人

職工 四二人

合名會社石塚石鹼製造所

所在地 名古屋市中區水筒先町二丁目八、九番地

製造者名 代表社員 石塚元雄

資本金 五萬圓(正味實產額二〇萬圓)

沿革 明治十一年先代石塚元行名古屋市東郊東山に東京職類化製々造所の支店を設立し

鹽牛馬の廢物利用に従ひしが、更に進んで石鹼製造を志し同十三年名古屋市東外堀町に株

式會社化粧石鹼製造所を起したり。其の後現在の地に移轉し名古屋石鹼合資會社と改稱し同四十年更に石鹼石鹼製造所と改めて今日に至る。  
 製品の種類 化粧、洗濯、工業用、藥用石鹼、其他  
 最近五ヶ年間に於ける生産數量、價格

年次	數量	價格
昭和元年	一七,〇〇〇	三三六,〇〇〇
同二年	一八,〇〇〇	三五二,〇〇〇
同三年	一七,〇〇〇	三四七,〇〇〇
同四年	一八,〇〇〇	三三六,〇〇〇
同五年	一九,〇〇〇	三〇〇九,〇〇〇

敷地、建物

敷地 四〇〇坪  
 建物 三〇〇坪

従業員

職員 一三人  
 工員 四四人

其の他の主要製造者

本縣に於ける石鹼工場の主なるものは、何れも名古屋市に在り、其等は相集りて名古屋石鹼製造組合を組織す。現在組合員一七名、其の主要なるものとしては、前記二工場の外に左のものあり。

製造者名	工場所在地	製品種類
名 芳 社	名古屋市南區笠寺町加福一ノ切	化粧、洗濯、洗濯用粉末
美 香 蘭	中區御器所町菱池二四	洗濯用粉末、髮洗粉
大正石鹼製造所	東區千種町馬走六六	化粧、洗濯
杉 浦 良 三	同 中區牧野町宮裏	洗 濯

尚組合員外の製造者一〇餘名あり。

(八) 護 謨 製 品

一、本邦に於ける護謨工業の沿革及現況  
 本邦に於ける護謨工業の起源は明治十九年東京市に於ける三田土ゴム製造會社の創立にあり。後同三十三年には明治ゴム、日本ゴム、東洋ゴムの諸會社設立せられ、更に日露戰役後の好況時代には角一ゴムを始め新會社相次いで起り、四十二年にはダンロップ、極東ゴム株式會社の設

立を見、生護謨の輸入四百五十噸に達せり。其の後斯業は躍進的發展を続け殊に歐州大戰に際しては生産激増し、大正八年には生護謨輸入額一萬噸を突破し本邦重要工業の一たるに至れり。戦後もタイヤ共の他の護謨製品の需要益々増加するに伴ひ、愈々盛大に赴き昭和四年には生護謨の輸入三萬五千噸に垂んとし護謨製品の生産額七千六百萬圓を越ゆる状態となり輸出七百七十餘萬圓輸入六百七十餘萬圓にして共にタイヤ額を主とす。今後自動車、自轉車の増加其の他隣衛及化學工業の進歩に伴ひ斯業の益々發展することは明かなることなりとす。

二、愛知縣に於ける護謨工業の沿革

本縣に於ける護謨工業は大正二年磯部惠太郎が名古屋市中區牧野町に日東ゴム製作所を創立したるに始まる。同所は大正七年組織を變更して日東護謨株式會社と改稱し、工業用護謨、護謨靴、ヒール、足袋底等の製造に従ひたるも大正十二年以後は専ら自轉車タイヤ、チユウプの製造を行ふに至れり。一方知多郡半田町に於ては大正八年愛知ゴム株式會社設立せられ、護謨靴、足袋底等の製造を開始し同十年には名古屋市にカネタゴム工業所、同十五年には井上ゴム製造所の設立を見たり。

この他に今より十數年前岡田一平は名古屋市中に於て生護謨其の儘を用ひ、加硫を行はざる所謂「原料」護謨靴の製造を開始したが、製法極めて簡易なるため、これに従事する者次第に増加し、現在四十餘名に上れり。

イ、原料

原料護謨には其の品質及産地により多數の等級あれども、縣下諸工場に於て普通使用するものは大體左の如し。

名	稱	一封度の價格(昭和六年六月調)
ク	レ	一五
	イ	一三・五
	ブ	一一・五
スタンダード、シート		
スタンダード、カッチング		
F	A	一三
	Q	二七
ブレン、スモークド、シート		

(原料護謨靴用)

産地は馬來半島を主とし、一部分ジャバ、スマトラにして、總て在神戸市商館の手を経て購入す。

加硫用の硫黄は内地産にして之れ亦神戸市の商人より購入す。一封度五——八錢なり。其の他の加硫促進劑、調合混和物等の産地及凡その價格左の如し。

品	名	産地	一封度の價格(昭和六年六月調)
ナブスチユート		内	一六
亞鉛華		同	一一
炭酸マグネシウム		同	一五

炭酸カルシウム 同 二一三  
 胡 粉 同 二  
 リトホン 獨 二二  
 カーボンブラツク 米 一八

ロ、製品の種類  
 本縣に於ける護謄製品の種類及其の生産歩合大略左の如し。  
 生産歩合(昭和五年)

製品の種類  
 自轉車タイヤ 二五・八  
 同 チューブ 七・九  
 乳母車タイヤ 三・八  
 自動車タイヤ修繕材料 三・五  
 護謄靴 〇・九  
 「原料」護謄靴 五三・三  
 護謄底、ヒール 一・二  
 機械用護謄 二・九  
 其他 〇・七

右の中「原料」護謄靴は主として奈良縣及本縣に産する特殊の製品にして殊に小児用の所謂

ハ、販 路  
 「豆靴に到つては本縣獨特の産物なりとす。

原料護謄靴以外の製品の仕向地は縣下及近縣を主とし一部分關東、東北地方に販路を有するものあり。原料護謄靴は全國に販路を有す。

ニ、生 産 費  
 生産費は製品の種類各工場の組織等により一定せざれども大體に於て製品價格に對する歩合次の如し。

製品種類	自轉車用タイヤ 及チューブ	護謄靴 護謄底	機械用ゴム 等の型物
原料代	五三・六七	三六	六〇
工賃	一三一・一五	三四	二〇
間接費	一八一・三四	三〇	二〇
間接費内詳			
燃料代	三一・六	} 一〇	三
電力費	三三・七		五
其他	二二・二	二〇	二

ホ、縣下最近五ヶ年間の状況  
 縣下に於ける最近五ヶ年間の生産數量價格左の如し。(特に調査したるもの)



製品種類	年次	昭和元年		同 二年		同 三年		同 四年		同 五年	
		数量	價格	数量	價格	数量	價格	数量	價格	数量	價格
自動車タイヤ		二二、四〇〇	七六、六三五	四八、〇〇〇	一六四、六五〇	五七、〇〇〇	一六二、七四〇	六四、八八〇	一七五、三七六	一八六、二六〇	七、二四四
同 ナメリア		七六、七八〇	三二、五九三	九〇、九六〇	四、九七〇	一六四、二〇〇	二一八、三三〇	一三六、六八〇	一三六、六八〇	一三六、六八〇	
乳牛車タイヤ		三三、四五〇	三三、四五〇	四五、〇七八	七五、七〇〇	五五、一六〇	二四、九〇〇	二〇、六二〇	二〇、六二〇	二〇、六二〇	
自動車タイヤ		五五、七二〇	三三、三七〇	三三、三七〇	三三、九〇〇	三三、九〇〇	三六、一五〇	二七、八〇〇	二七、八〇〇	二七、八〇〇	
修繕材料		—	—	—	—	—	九、〇〇〇	二二、五〇〇	二二、五〇〇	二二、五〇〇	
護 謨 靴		数量	二二、〇〇〇	数量	二二、五〇〇	数量	二二、二〇〇	数量	一九、二〇〇	数量	八、五〇〇
		價格	二七、二〇〇	價格	二五、〇〇〇	價格	二二、〇〇〇	價格	二二、九〇〇	價格	六、三五〇
護謨底ヒール		数量	一〇〇、四六〇	数量	七四、二〇〇	数量	五〇、〇〇〇	数量	五〇、七〇〇	数量	四九、一〇〇
		價格	四三、一六七	價格	二六、六〇〇	價格	二〇、四〇〇	價格	一五、五〇〇	價格	九、〇二〇
原料護謨靴		價格	五六、〇〇〇	價格	五六、〇〇〇	價格	五六、三七〇	價格	四九九、二〇〇	價格	三八五、〇〇〇
機械用護謨		價格	一五、七四〇	價格	三五、〇〇〇	價格	三八、九六〇	價格	二四、〇〇〇	價格	二一、〇〇〇

商工省工場統計による本縣生産額は昭和四年に於て二八三、二三四圓にして、本邦生産額の約〇・四％に相當す。

縣下に於ける最近五ヶ年間の工場職工數左の如し。(愛知縣統計書に依る)

年次	其 他	
	職 工 數	價 格
大正十四年	一〇六	一八、六六〇
昭和元年	一七	一八、六六〇
同 二年	一四	一四、六四五
同 三年	一六	一一、九三〇
同 四年	二八	八三九、二一六
同 五年	三七	七二、五九〇

三、愛知縣に於ける護謨工業の現在及將來

本縣に於ける護謨工業は小規模工業を主體となす。即ち所謂「原料」護謨靴の生産は總産額の五割餘を占め、其の業態は悉く家内工業にして全然手工に依るものなり。而して本製品は本縣の特産品なりと稱せらる。

更に總額の三割強の生産をなすタイヤにつきて見るも、悉く自轉車タイヤにして其の經營の規模小く四十人内外の職工を使用するに過ぎざる上其の製品も決して統一せるものにあらず。

凡そタイヤの需要先なる自動車、自轉車等の生産は地方的局限性に乏しき經營業態を有し原料

職工、市場等の關係によりて何地に於ても設立し得べきものにして従つて其の經營は概ね大規模工業たるものなり。然も本業の如きは最も産業合理化に適し、製品の標準化につきても風に之れが實施を見る處なり。故にタイヤ製造業の如きも車輛製造と併ひて同じく大規模經營の下に標準品を供給せざるべからざるものなり。而して小規模經營の下にかゝる事業の存立するは粗立工業なる自轉車製造業が極めて廉價なる製品を市場に供給する小工場の設立を許し、又タイヤ條緒のための代品として生産せらるゝ必要上その存立の理由を發見するものなり。名古屋市を中心とする本縣の如く道路、交通機關、産業々態等の關係上自轉車の需要甚だ多き處に於てはかゝる事業の存立亦然るべき處なり。

原料ゴム靴以外普通の護謄靴製造業に到りては漸次その需要の減少と共に衰態に傾き現時見るべきところの生産なし。

以上本縣の護謄工業は家内工業又は小規模工業の範圍を出でず、又將來も暫くはこの狀態に止るべし。

#### 四、縣下優良品製造者の推奨並に其の概況

縣下に於ける護謄製品製造業者中優良品製造者として推奨すべきもの左の如し。

名古屋市中區牧野町字多利一四番地

日東護謄製造株式會社

同 南區野立町字切戸裏一五九六番地

井上護謄製造所

推奨工場の概況左の如し。

#### 日東護謄製造株式會社

所在地 名古屋市中區牧野町字多利一四番地

製造者名 社長 田中貞二

資本金 一〇萬圓

沿革 大正二年磯部嘉太郎現在の地に日東ゴム製作所を創立す。同七年株式組織となし

日東護謄製造株式會社と改稱して今日に至る。  
製品の種類及最近五ヶ年間に於ける生産數量價格

年次	製品種類		同	ナチュア	合
	自轉車	タイヤ			
昭和元年	數量	一九六〇〇		三五、二八〇	五四八八〇
	價格	七〇、五六〇		二一、二六八	九一、七二八
同 二年	數量	二一〇〇〇		三六、九六〇	五七、九六〇
	價格	七一、四〇〇		二〇、三二八	九一、七二八
同 三年	數量	二四、六〇〇		八四、二〇〇	一〇八、八〇〇
	價格	七一、三四〇		四一、一〇〇	一一二、四四〇
同 四年	數量	二六、七八〇		四〇、三二〇	六七、一〇〇
	價格	七二、五七六		二〇、一六〇	九二、七三六

敷地、建物

敷地 六八三坪  
建物 三九一坪

従業員

職員 八人  
職工 四二人

井上ゴム製造所

所在地 名古屋市南區野立町字切戸裏一五九六番地

製造者名 井上慶一

資本金 一〇萬圓

沿革 井上慶一は元名古屋市日東護製遺株式會社に常務取締役兼技師長として在職、

同十五年同社退社後直ちに創立す。

製品の種類及最近五ヶ年間に於ける生産數量價格

同	五	
	年	年
價格	七五、六〇〇 <small>圓</small>	四三、六八〇 <small>圓</small>
數量	二、八四〇 <small>圓</small>	七、三九二 <small>圓</small>

年	製品種類		自轉車	タイヤ	同	チルトア	合	計
	數量	價格						
昭和	數量	價格						
光	數量	價格						
年	數量	價格						

同	五	
	年	年
價格	一、〇六六 <small>圓</small>	三、五三四 <small>圓</small>
數量	四、二二〇 <small>圓</small>	九、三三〇 <small>圓</small>
價格	一〇、一八〇 <small>圓</small>	三五、〇〇〇 <small>圓</small>
數量	三八〇 <small>圓</small>	八八〇 <small>圓</small>
價格	九、一四〇 <small>圓</small>	三三、九〇〇 <small>圓</small>
數量	三、三四〇 <small>圓</small>	八、〇〇〇 <small>圓</small>
價格	九、三三〇 <small>圓</small>	二四、七五〇 <small>圓</small>
數量	二、七〇〇 <small>圓</small>	四、五〇〇 <small>圓</small>
價格	六、〇七五 <small>圓</small>	一四、二五〇 <small>圓</small>
數量	一、八〇〇 <small>圓</small>	二、五〇〇 <small>圓</small>
價格	九、三三〇 <small>圓</small>	二、一八〇 <small>圓</small>
數量	三、三四〇 <small>圓</small>	七、五〇〇 <small>圓</small>
價格	三、三四〇 <small>圓</small>	二、一八〇 <small>圓</small>
數量	一、〇六六 <small>圓</small>	四、三〇〇 <small>圓</small>

敷地、建物

敷地 五二八・六坪  
建物 二二七・七坪

従業員

職員 六人  
職工 四〇人

其の他の主要製造者

右の外本縣に於ける製造者の主なるもの左の如し。

製造者名	工場所在地	製品種類
カナタゴム工業所	名古屋市中區御器所町北市場七四	乳母車タイヤ、機械用ゴム
愛知ゴム株式会社	知多郡半田町西勘内三ノ一	護謄靴、護謄底類
大洋ゴム製造所	名古屋市東區下飯田町松本一八	自動車タイヤ修繕材料
岡田 一平	同 千種町池内一七	原料護謄靴
杉江 鈔次郎	同 中區梅川町六七	同
熊本喜代三	同 西區南切町上十二島七三	同
南谷直三郎	同 則武町牛島七八〇	原料護謄靴用生地
大野 友七	同 則武町長廣四三七	原料護謄靴用生地
彌 喜造	同 東區下飯田町松本三五	同

### (九) 石版轉寫紙

#### 一、石版轉寫紙の沿革

直接印刷する事能はざる器物に印刷せる特種の紙を貼付して畫模様を施す方法を轉寫と稱し、

此場合に使用する紙を轉寫紙と云ふ。

石版轉寫紙の用途は廣汎にして陶磁器、磁器、硝子、木製品、金屬製品、臘燭等に使用せられ其加工方法も多種多様なり。本邦に於ける陶磁器用轉寫紙の發明者は小栗國次郎にして、同人は明治二十九年名古屋市中に於て研究を始め翌三十年にその成績を發表し、三十五年頃より新製品を發表せりといふ。明治末期に於て我國陶磁器工業は石炭窯による燒成法による燒成並に機械の應用等によりて急激に其産額を増加し、引續いて歐洲大戰による燒成法による燒成並に機械の輸出をみるに到り、轉寫紙の需要も亦著しく増加せり。こゝに於て田中轉寫印刷所は大正八年名古屋市東區東主税町に事業を開始し中京轉寫紙印刷所も翌大正九年株式会社として小栗國次郎の事業を繼承し兩者共に陶磁器用轉寫紙の外磁器用、硝子用の轉寫紙を發明し、事業益隆盛となりて今日に到れり。

現在に於ては陶磁器用轉寫紙が従來歐洲より輸入せられたるを殆ど防濕すると共に珪那用のものは進んで支那方面に輸出する状況にして、本事業が名古屋市中に於てのみ發達し、他地方に製産せられざる所以は地の利を占むる關係あるも最初の發明者たる小栗國次郎の功績によること大なるものありと信ず。

#### 二、最近五ヶ年間の状況

最近五ヶ年間の製造工場數並に産額次の如くなるが各工場何れも石版印刷業を營む故生産額中には轉寫紙以外の石版印刷紙も含めり。



右の外日本陶器株式會社に於ても製造せられつゝある由なるが同社製品は一般市場に販賣せざるを以て右數字中には含まざるものとす。

### 三、轉寫紙印刷業の現在及將來

前表の如く轉寫紙生産額は昭和三、四年を頂上として昭和五年に約半減せられたるは世界的不況による陶磁器輸出の減少、支那に於ける排日等の影響を受けて陶磁器用並に珪瑯用轉寫紙の需要激減せるほか、技術的方面に於てゴム印の發達により用途の減少せるためにして、最近の轉寫印刷業は受難時代にあるものと云ふべし。昭和六年三月に於ける製造工場四、職工約七〇名なり。

要するに該轉寫紙は今日に於ては陶磁器用として最も多量に使用せられ、之れに次で珪瑯硝子の順位をなし、陶磁器珪瑯に於ては屢々完成の域に達せるも硝子に於ては未だ充分満足の状態

年 度	製 造 工 場 数	生 産 額
昭 和 元 年	三	一八萬圓
同 二 年	三	二九萬圓
同 三 年	三	三〇萬圓
同 四 年	四	三一萬圓
同 五 年	四	一五萬圓

にあらざるものと思はるゝ點あるを以て、今後尙研究の余地あるべく其完成の曉は需要相當多量となるべき可能性あり。又此等以外に木工品、金屬品、其他の方面に就き攻究、且つ製造の研究を行ふ時は應用の範圍相當擴大さるべく、特に該業は殆んど本縣特有の産業なる等の點より大に獎勵すべきものと認む。

### 四、縣下優良品製造工場の推奨

優良轉寫紙製造工場として推奨すべきもの左の如し。

名古屋市東區杉村町舟附

株式會社中京轉寫紙印刷所

名古屋市東區東大會根町

田中轉寫印刷所

### 株式會社中京轉寫紙印刷所

所在地 名古屋市東區杉村町舟附

社長 水野 漢

沿革 明治三十年小栗國次郎陶磁器用轉寫紙の製造法を完成す。大正九年二月株式會社

中京轉寫紙印刷所其事業を繼承し、水野漢社長となる。其後珪瑯用轉寫紙を發明す。

製品の種類 燒付用轉寫紙（陶磁器、珪瑯、硝子用）不燒用轉寫紙（硝子、蠟燭、木製品、

漆器、金工品用）

資本金 拾五萬圓

敷地及建物

敷地 一六三・二五坪  
建物 一一五・二五坪

最近五ヶ年間の生産數量

年	敷	量
昭和元年		六九〇〇〇枚
同 二年		七七〇〇〇枚
同 三年		一〇〇〇〇〇枚
同 四年		一〇八〇〇〇枚
同 五年		六五〇〇〇枚

従業員 七名

職工 三五名

田中轉寫印刷所

所在地 名古屋市東區東大曾根町上三丁目一〇二〇番地

工場主 田中恒一

沿革 大正八年七月名古屋市東區東主税町にて事業を開始す。昭和四年四月現在地へ移す。

製品の種類 陶磁器用、硝子用、珪朧用  
資本金 拾萬圓  
敷地及建物 敷地 二九八坪  
建物 一九九坪

最近五ヶ年間の生産數量

年	敷	量
昭和元年		四八四〇〇枚
同 二年		五二七〇〇枚
同 三年		八六一〇〇枚
同 四年		九〇五〇〇枚
同 五年		五〇〇〇〇枚

従業員 一二名

職工 二九名

其他工場

一、伊藤轉寫印刷所（名古屋市東區錦屋町一丁目四四）伊藤 茂

昭和四年創業

二、小林轉寫印刷所（名古屋市東區山田町二）  
大正九年創業、昭和四年現在の地に轉す。

## (三) 陶 齒

### 一、陶齒製造業の沿革及現況

名古屋市中に於て宿澤繁は夙に思を陶齒の製作に致し明治十七年四月や、完全なる有孔陶齒の製作所を創始せり。之本邦に於ける斯業の濫觴たり。現在中島甚太郎其業を繼げり。

陶齒は齒科醫が缺損したる齒牙を補綴する目的に使用する材料にして自然の外観と咀嚼機能とを十分に恢復せしむるに足る品質を備へざる可からず。従つて其大きさと形態と色調とを自由に選擇し得るため極めて多くの種類を要し、又其品質は強大なる咀嚼壓に堪へ、任意研磨して形態を變じ得る密度を有せざるべからず。而して形態色調は一定の番號によつて示されたる規格に厳密に適合せざれば商品として其價值を失ふものとす。

陶齒の種類は有孔陶齒とピン陶齒とに大別する事を得、有孔陶齒は主としてゴム床用にて比較的低級の品なりと雖此の中に特殊の高級品ありて金屬床に「セメント」を以て合着して用ひらるゝものあり。ピン陶齒は陶材中に特殊金屬のピンを保有するものにして比較的高級品なり。

### ゴム床用金床用の別あり。

名古屋市中に於ける陶齒製造業は全く家内工業に屬し、工業的工場組織をなすもの少し。蓋し製品の性質と手先の仕事が主要なる部分を占め、機械の力を利用し得るは其材料たる陶材及特殊合金のピン製作なるも、之等は製品の量販單位が極めて小なるが故に大工場を要せざるによるなり。

職工は一定の工場に勤務するもの、外製作の或工程は自宅に於て家族の幾人かが手傳ひ従事する場合多し。此事は製品の品質規格の統一等に多大の影響を來すものあるべし。

我國の陶齒は其一部の製品に就てはや、完成の域に向ひつゝ、ありと雖通觀すれば尙其品質に正確なる一定の規格を缺き高級技工上に信頼して用ひ能はざるものあり斯業にたゞさるものよく協力して益々研究改良を加へ國産品の眞價を高むる事に努むべきなり。

### 二、本縣陶齒製造業の現況

愛知縣下に於ける陶齒製造工場は十數ヶ所あり。年産額約拾萬圓にして原料は何れも瀬戸市及品野町附近に産する長石、礎石等（價格八貫匁一圓三〇錢乃至一圓五〇錢）を使用す。

工場の主なるもの左の如し。

名古屋市東區千種町字仲田七四

市 林 五 秀 園

同 宇池田一七

宿澤式陶齒製作所

同 宇池ノ内二五二

伊藤陶齒合資會社

東春日井郡守山町守山五二七  
同 水野村字上水野安土

名古屋市東區石神堂町六八

中村齒科工業合資會社  
山 仙 工 場  
櫻 井 司 馬 次 郎

本邦に於ける代表的工場は京都市松風陶齒製造株式會社にして、同社製品は歐米各國の製品に比し何等遜色なし、縣下工場の規模製品の品質に於て右松風陶齒に比較し能はざる状況にあるも稍優良なるもの、内容を擧ぐれば次の如し。

### 市 林 五 秀 園

所在地 名古屋市東區千種町字仲田七四

工場主 市 林 國 松

資本金 一五、〇〇〇圓

沿革 明治四〇年十月創業

敷 地 九四坪

建 物 六二坪

年産額 一三、二八圓（昭和五年）

一、二九〇、五〇〇本

職 員 三名

職 工 一七名

### 宿 澤 式 陶 齒 製 作 所

所在地 名古屋市東區千種町字池田一七

工場主 中島甚太郎

沿革 明治十七年四月宿澤榮宿澤陶齒製作所を創業し、後中島甚太郎業を繼承す。

敷 地 一七・七坪

建 物 七六・五坪

年産額 一、〇〇〇圓（昭和五年）

一三三、〇〇本

職 員 一名

職 工 八名（外職七名）

## (二) 人 造 研 磨 砥

愛知縣に於ける人造研磨砥製造工場はナショナル製砥所の一ヶ所にして、特種研磨砥を製造す。而して其工場の内容を示せば次の如し。

### ナショナル製砥所工場

所在地 名古屋市東區千種町豊前二八四

工場主 鈴木末吉

資本金 五萬圓



沿革 大正元年八月創業  
敷地及建物 三、五七坪

建物 二一七坪

生産數量 數量 二一、六二四個

價格 二、三、七八六圓（昭和五年度）

従業員

職員 二名  
職工 三名

### 〔三〕 染織工業之部

#### (一) 絹織物

一、本邦絹織物生産狀況

昭和五年度本邦絹織物産額は第一表に見る如く、總額三億二千六百八十一萬五千二百二十二圓  
内縮緬、羽二重、緞子、富士絹、絹袖等廣幅物三割一分四厘、小幅物六割六分、特殊物二分六  
厘にして、其の生産狀況を地方別に見れば京都が最高とし、群馬、福井、石川等之れに次ぐ。

第一表 昭和五年度本邦絹織物生産額（商工省調査）

地方別	種類別			
	廣幅物	小幅物	特殊物	計
京 都	一七六三五、五四四 <sup>円</sup>	六、六二五〇八八 <sup>円</sup>	五八二三四六〇 <sup>円</sup>	八五〇七四〇五 <sup>円</sup>
群 馬	八八五〇、二八二	二九六四九五一	六八二八	三八四九二〇六 <sup>円</sup>
福 井	二九、三九、三五三	八、三五、三九四	一八、九六〇	三七、五七、三〇七
石 川	一八、六八四、七四七	一四、五四、二〇一	—	三三、二、九四八
東 京	六九九八二五	二四、〇、六八八五	四三五三二一	二五一、六、一〇二

春	宮	德	鳥	千	沖	岡	鳥	長	愛	廣	宮	茨	長	兵
真	崎	島	取	葉	淵	山	根	崎	綾	島	城	野	庫	
三、一〇九	二四二	八四	一八八	—	—	三九〇	一五〇	一、九六七	三三、九四九	—	一三、五二四	—	二八、八四〇	一六、九六八
九三、四六	四五、三八五	一五三、二一七	六六、九三六	七七、九七〇	八六、九四八	八六、五五七	九三、四二五	一〇、九四一	八〇、七二三	二二、九三三	五、一八七	五七、一六〇	六八、一六八	六、一六八
三、一六二	六八七	七七七	四〇	五〇、三二	—	八三〇、六	四、五〇八	一一、七五	七九〇	二八	二、三四四	一、二八九	一、三六	一、三六
四四、〇七九	四六、三一四	五四、一七八	六七、一六四	八三、〇二	八六、九四八	九五、二五三	九七、〇八三	一一、四一八	一、四四三	一三、九三六	五三、四六六	五五、六二九	六〇、八七九	六〇、八七九

靜	神	大	愛	山	富	藤	福	滋	山	岐	新	崎	柳
岡	奈	阪	知	形	山	見	島	賀	梨	阜	岡	玉	木
六七、一六〇	一〇、七二〇	二、五〇一	一、五六五	一、六五二	二、二二五	—	三、七四六	四、二六六	九四八、八九二	五、一四三	六、五四八	九〇、八七三	一、九六六
二二、七五〇	五八、七九〇	二〇、一五九	三、一〇四	三、二〇八	三、〇八九	五、三七一	一、七八九	四、六三〇	三、七七二	四、六四一	一、二九七	一、三七八	一、六八四
二〇、五二	二、七五七	二〇、四四三	六、〇二二	五八、八三三	二、三三三	一、七一五	七〇〇	五九、一五五	二、九三六	一、二八四	五、二〇一	—	—
九三、一五六	一、六七、一〇一	二、二五〇	四、七二九	四、八六六	五、三三七	五、三三七	五、五三四	五、六四四	八、一七三	九、七八六	一、三六三	一、四六三	一、八八〇

品種	昭和三年	昭和四年	昭和五年
三 重	一九、六三四	一一、七三七	三三、七七一
大 分	—	—	三三、九〇三
熊 本	—	五、六三一	—
岩 手	—	一九、一五三	—
佐 賀	—	一四、六七四	—
高 知	—	一四、一五三	—
秋 田	八	八、六三二	—
青 森	—	六、六六八	—
香 川	—	五、八五三	—
北 海 道	—	四、八六六	—
和 歌 山	二一〇	一四、三〇〇	—
合 計	一〇、二五九一、四四九二、五、六九三、一六七	八、五三〇、六〇六	三三、六八一、五三二

次に本邦絹織物の輸出状況は第二表に示す如く、昭和四年に於ては昭和三年末輸出額より九分六厘増加せしも昭和五年末に於ては昭和四年より五割餘の減少となれり。而して其の減少割合を種類別に見れば、羽二重四割七分八厘、絹織四割九分一厘、富士絹四割六分八厘、壁及縮緬

三割五分九厘、縮緬子七割七分六厘、其の他の絹織物五割三分四厘となる。

第二表 輸出絹織物品種別仕向地別統計表（商工省名古屋輸出絹織物検査所調査）

品種	仕向地	昭和三年	昭和四年	昭和五年
羽	佛 國	九、一九〇、五五一	九、四五三、六九五	三、三九四、九六三
	英 吉 利	六、二六二、一四五	五、五五〇、六〇九	三、一七八、三五一
	英 領 印 度	三、三三二、二四五	三、四九七、五二二	一、三三〇、七八一
	北 米 合 衆 國	三、三二七、二四六	三、四三三、四八一	一、三三三、七三三
	リ ン セ ー イ	三、〇七七、〇八三	一、八〇二、二〇四	一、八一九、八五三
	濠 太 利 逸	一、四八七、七五五	一、一五九、〇九三	七、八〇、九四七
	獨 逸	九、〇九〇、一〇四	一、一四九、六八二	五、七二、四六二
	南 阿 弗 利 加 聯 邦	八、五九三、三三七	六、三二、四八二	四、七八、三〇三
	暹 羅 然 丁	九、四〇、九〇七	五、九五〇、〇七八	三、五九〇、二五五
	英 領 加 拿 大	八、七〇、三三四	五、七五八、八二八	三、〇二六、六九九
	其 他 ノ 諸 國	三、八三三、三六四	三、五二二、二二二	二、五〇九、三三七
	合 計	三三、〇一三、三三六	三〇、三五四、六三三	一、五八四、〇三〇





絹		絹		絹		絹	
英	日	英	日	英	日	英	日
英領	吉	英領	利	支	支	支	支
印度	利	加	加	加	加	加	加
度	度	那	那	那	那	那	那
合	計	合	計	合	計	合	計
一六八、一八〇〇	五、五〇二、五一一	一、二〇七、二二五	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七
七四七、四一九	八二九、三二〇	一、〇九八、二二五	一、〇五七、四七一	一、〇五七、四七一	一、〇五七、四七一	一、〇五七、四七一	一、〇五七、四七一
七、四四四、四八一	一、〇五九、三〇一	八、九九三、〇〇一	六、〇五三、〇九〇	六、〇五三、〇九〇	六、〇五三、〇九〇	六、〇五三、〇九〇	六、〇五三、〇九〇
六、〇四四、四八八	五、四四八、二二四	四、五九七、四九〇	三、四〇六、二八六	三、四〇六、二八六	三、四〇六、二八六	三、四〇六、二八六	三、四〇六、二八六
五、〇〇四、七二五	四、九四〇、七九九	四、四四二、二八九	四、〇七九、九四九	四、〇七九、九四九	四、〇七九、九四九	四、〇七九、九四九	四、〇七九、九四九
三、四四六、〇八〇	三、三三二、二八〇	二、二九〇、五一一	二、一八八、七九八	二、一八八、七九八	二、一八八、七九八	二、一八八、七九八	二、一八八、七九八
三、三三二、二八〇	三、三三二、二八〇	二、二九〇、五一一	二、二九〇、五一一	二、二九〇、五一一	二、二九〇、五一一	二、二九〇、五一一	二、二九〇、五一一
二、四二五、八八八	二、四二五、八八八	二、四二五、八八八	二、四二五、八八八	二、四二五、八八八	二、四二五、八八八	二、四二五、八八八	二、四二五、八八八
—	—	—	—	—	—	—	—
三、〇三三、三九九	三、〇三三、三九九	三、〇三三、三九九	三、〇三三、三九九	三、〇三三、三九九	三、〇三三、三九九	三、〇三三、三九九	三、〇三三、三九九
一、四〇三、三五五	一、四〇三、三五五	一、四〇三、三五五	一、四〇三、三五五	一、四〇三、三五五	一、四〇三、三五五	一、四〇三、三五五	一、四〇三、三五五
一、三三三、二八八	一、三三三、二八八	一、三三三、二八八	一、三三三、二八八	一、三三三、二八八	一、三三三、二八八	一、三三三、二八八	一、三三三、二八八
一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七	一、〇四四、五九七
八、一七七、二一四	八、一七七、二一四	八、一七七、二一四	八、一七七、二一四	八、一七七、二一四	八、一七七、二一四	八、一七七、二一四	八、一七七、二一四
五、八五七、四二七	五、八五七、四二七	五、八五七、四二七	五、八五七、四二七	五、八五七、四二七	五、八五七、四二七	五、八五七、四二七	五、八五七、四二七
二、二八、二二〇	二、二八、二二〇	二、二八、二二〇	二、二八、二二〇	二、二八、二二〇	二、二八、二二〇	二、二八、二二〇	二、二八、二二〇

絹		絹		絹		絹	
支	支	支	支	支	支	支	支
那	那	那	那	那	那	那	那
合	計	合	計	合	計	合	計
五三七、八七三	一、〇七二、九九三	一、一五五、九六六	一、一五五、九六六	一、一五五、九六六	一、一五五、九六六	一、一五五、九六六	一、一五五、九六六
一、一〇二、六四三	二、五九二、六六五	二、五九二、六六五	二、五九二、六六五	二、五九二、六六五	二、五九二、六六五	二、五九二、六六五	二、五九二、六六五
三二六、七九三	二、二七二、三四四	二、二七二、三四四	二、二七二、三四四	二、二七二、三四四	二、二七二、三四四	二、二七二、三四四	二、二七二、三四四
七三九、五二九	三、三八五、五六二	三、三八五、五六二	三、三八五、五六二	三、三八五、五六二	三、三八五、五六二	三、三八五、五六二	三、三八五、五六二
一、〇五六、四七四	三、二六一、九六二	三、二六一、九六二	三、二六一、九六二	三、二六一、九六二	三、二六一、九六二	三、二六一、九六二	三、二六一、九六二
二六八、二七三	一、一三八、五二〇	一、一三八、五二〇	一、一三八、五二〇	一、一三八、五二〇	一、一三八、五二〇	一、一三八、五二〇	一、一三八、五二〇
五八、一三三、九九五	一九六六、二四八六	一九六六、二四八六	一九六六、二四八六	一九六六、二四八六	一九六六、二四八六	一九六六、二四八六	一九六六、二四八六
二二七、九八四、二四九	一、四〇三、〇八六、六三三	一、四〇三、〇八六、六三三	一、四〇三、〇八六、六三三	一、四〇三、〇八六、六三三	一、四〇三、〇八六、六三三	一、四〇三、〇八六、六三三	一、四〇三、〇八六、六三三
六五三、二九三、八四四	六五三、二九三、八四四	六五三、二九三、八四四	六五三、二九三、八四四	六五三、二九三、八四四	六五三、二九三、八四四	六五三、二九三、八四四	六五三、二九三、八四四

二、本縣絹織物生産状況  
 本縣輸出向絹織物として主なるものは襦子、縮緬、「ジョーゼット」、富士絹等にして昭和五年末の産額を示せば第三表の如し。

第三表 昭和五年度本縣絹織物生産高(商工省調査)

絹織物	縮緬	縮緬	縮緬	縮緬	縮緬	縮緬	縮緬
及	及	及	及	及	及	及	及
及	及	及	及	及	及	及	及
一〇三、四七九	一〇三、四七九	一〇三、四七九	一〇三、四七九	一〇三、四七九	一〇三、四七九	一〇三、四七九	一〇三、四七九
一五八、五九八	一五八、五九八	一五八、五九八	一五八、五九八	一五八、五九八	一五八、五九八	一五八、五九八	一五八、五九八

富士絹	絹	絹子 (兼裏地及 含裏地丸)	其 の 他	合 計
一、六二〇、七四八	八〇〇、九七六	二二、五〇六	三七二、九〇一	三、一〇四、三四一
四四九、四一八	一八六、三八九	四六、一七〇	一、五六五、〇三四	六〇、二一三
—	—	—	—	四七二、九五八

表中輸出向縮緬、富士絹、絹朱子、其の他絹織物は名古屋市並びに丹羽郡、東春日井郡地方に於て、内地向絹織物は丹羽、兼栗、中島の各郡及び名古屋市に於て製織され、昭和五年度に於ける絹織物生産高は四百七十二萬九千八百八十四圓にして、本邦絹織物生産額三億二千六百八十一萬五千二百二十二圓の一分四厘に相當す。而して其の産額順位は第十六位を占む。

尚第四表に依り本邦絹織物輸出状況を見るに昭和五年度に於て縮緬は著しく増加するも、富士絹は之れと反對に減少を示し、本邦昭和五年度絹織物總輸出額の約一分四厘に相當す。

第四表 本縣絹織物輸出高

昭和三年

種類別	縮緬	富士絹	絹朱子	計
組合別	縮緬	富士絹	絹朱子	計
名古屋織物同業組合	二、七六〇	一〇、六八八	三、三四一	一〇、七四五
知多西白木綿同業組合	—	四、九二七	一、七〇〇	四、二二七
尾州絹織物同業組合	—	一、四六四	—	一、四六四
東春織物同業組合	—	二、三五五	—	二、三五五
合 計	二、七六〇	一九、一〇九	五、〇四一	二二、九一〇

昭和四年

種類別	縮緬	富士絹	絹織物	計
組合別	縮緬	富士絹	絹織物	計
名古屋織物同業組合	二、六七〇	九、八九九	—	九、九八八
合 計	二、六七〇	一八、七〇一	—	二一、三七一



品名	工場創始年次	工場建坪	工場設備	工場所在地及製造者名
綿織物 四角領巾 絹織物 絹織物 絹織物 絹織物	明治四十年	七三〇六坪	織機 三五〇臺	名古屋市西區名古塚町 帝國地綿織物株式會社

其の他主なる製造工場左の如し。

品名	本織物創始年次	工場建坪	工場設備	工場所在地及製造者名
紋紗一重、富士絹	大正十年	四五〇坪	織機 五〇臺	丹羽郡古野町 津田田三郎
富士絹	大正十二年	九七五坪	織機 三八臺	丹羽郡扶桑村 近藤龜藏 織保

## (二) 人絹織物

### 一、本邦人絹織物生産状況

本邦に於ける人造絹糸の需要は當初打紐、肩掛等の狭き範囲を出でざりしが近時其の製造技術の發達に伴ひ本絹糸と殆ど同様な外観及び手觸を有し、而かも其の價格の低廉なる爲め一般民衆の衣服原料として必需品となり著しく需要範圍を擴大せり。即ち内地向としては帯地、着尺物其の他あらゆる高數品を製織し、尙朝鮮及び臺灣への移出向或は印度、比律賓、海峽羣民地、阿弗利加、支那方面への輸出向を多量に生産するに至れり。就中最近輸出向の急激なる發

展は本邦に於ける人造絹糸工業に對し大に注目す可きことなり。今最近の本邦人絹織物(愛織物も含む)年産額を示せば第一表の如し。

### 第一表 本邦人絹織物生産高

昭和三年	昭和四年	昭和五年
五五七九五、〇〇圓	八五六二二、〇〇圓	一〇九七二、七五圓

(但し昭和三年及び昭和四年は日本紡織年鑑に依り昭和五年は商工省調査に依る)

要するに人造絹糸製造技術の發達と共に消費方面の技術も亦著しく進歩し、一年と増加の趨勢にあり、尙之れを各府縣別にて順位を示せば第二表の如し。

### 第二表 昭和五年各府縣人絹織物生産高(商工省調査)

品名	生産高	品名	生産高
絹糸	三六、五二五、三七六圓	群馬	二七、九四八、三三六圓
五川	九七、七〇九、一六圓	愛知	五四、五一五、四〇圓
新潟	二七、四九二、〇〇圓	山形	二二、七三二、六八圓
山梨	一、七八九、九七六圓	東京	五四、四一九、六圓
滋賀	二四、〇九九、四圓	和歌山	一九、七四四、七圓
		神奈川	一八、一七〇圓



高知	一八〇、九五三圓	兵庫	一三〇、六〇二圓	岡山	八〇、四三三圓
大 阪	七八、七三七圓	場 玉	七五、九五三圓	富 山	六八、九八一圓
廣 島	六七、九八一圓	奈良	四一、三四七圓	愛 媛	二五、七三三圓
其ノ他	七、三二二圓	合 計	一〇、九七二、二七五圓		

次に人絹織物の種類を調査するに第三表の如く紋織物最も多く製織され、第四表の如く交織物としては綿との交織を第一とし毛との交織物其次に位す。

第三表 昭和五年度人絹織物種類別生産高(商工省調査)

二人絹(襪を含む)  
 縮緬(襪を含む)

紋 織 物  
 一、八九七、六四二米  
 五、八八七、二一九圓

天 鷲 絨  
 八一、九〇〇、〇五一米  
 一、九六五、〇五五圓

其 の 他  
 八一、五六一米  
 四〇、二五五圓

計  
 三二、〇一五、〇五六圓  
 五九、九〇七、七三五圓

第四表 昭和五年度人絹交織物生産高(商工省調査)

綿 交 織 物  
 八、九三二、三四七圓

麻 交 織 物  
 五、九五八圓

毛 交 織 物  
 三、四八七、二六一圓

計  
 一、四二五、五六六圓

其他參考として内地向人絹織物を示せば次の如し。

第五表 昭和五年度内地向人絹織物種類別生産高(商工省調査)

二人絹小幅織物(絹との交織物を含む)  
 縮緬(襪を含む)

着尺物(羽尺袴地を含む)

其 の 他  
 七五〇、六三八反  
 三、五八一、四五七圓

小 計  
 一、四八八、七八六反  
 五、二五五、五五七圓

二人絹特殊物(絹との交織物を含む)

男 物 帶 地  
 二九九、九六五米  
 四四五、五二一圓

女 物 廣 幅 帶 地  
 三、三九一、九六五米  
 三、九二二、八七八圓

女 物 片 側 帶 地  
 七、八四二、三一九米  
 一八、七〇七、三一六圓

リボン及テープ  
其の他

小計 一六、七〇五、八六七  
一八二、四五三圓  
七二〇、〇五三圓  
二二、九七八、二一圓  
三三、三七八、九七四圓

尚地方別の絹織物種類の主なるものを挙げれば第六表に示す如し。

第六表 (帝國人絹株式會社調査)

福井縣	朝鮮、支那、印度並に南洋向人絹、平織、紋織、「ゼイル」、佛蘭西縮緬
群馬縣	朝鮮、支那、印度並に南洋向人絹、紋朱子並に羽二重、文化九寸、朋裏地、博多九寸、糸錦、廣帶
京都府	帶地並に組紐、縮緬
栃木縣	紋朱子、錦紗、御召、縮
山梨縣	人絹白生地、男帶、内地着尺
山梨縣	洋傘地、洋服裏地、甲斐絹
石川縣	人絹羽二重、縮緬、朱子
愛知縣	人絹羽二重、人絹綿毛各交織物、セル、蠶綿布、縮緬、内地向着尺
岐阜縣	縮緬

靜岡縣 内地向着尺、サロン、縮三ツ綾  
新潟縣 内地向着尺  
廣島縣 雜綿、布

次に其の移出出の状況を示せば左の如し。

(イ)、移出向

移出先は朝鮮及臺灣なれど就中朝鮮の移出多額にして其の種類を列挙すれば次の如し。  
 雙人絹 縞子及縞子、文華絹、絹(唐杭羅、銀座) 熟素、紗及紋紗、其の他  
 經絹緞人絹 甲斐絹、熟素(紋共)、縞子及縞子、紗及綾紗  
 經絹緞人絹

經人絹緞綿

而して其の移出高を示せば第七表の如し。

第七表 最近三年間の朝鮮及臺灣方面への移出高

(朝鮮總督府殖産局及び臺灣總督府殖産局調査)

所別	年度別	昭和三年	昭和四年	昭和五年
朝鮮向移出		六、八四七、六九五圓	七、八六六、四六一圓	八、七〇三、三四八圓
臺灣向移出		四、四八四、二八圓	二、九五、二七圓	三、〇三〇、二四圓

(ロ)、輸出

人絹織物は生絲、綿織物、絹織物に次ぐ重要輸出品にして其の輸出先は第八表に示す如く英領印度を第一とし、蘭領印度、比律賓、海峽殖民地、香港、支那等なれど、銀崩落及び日貨排斥に依り支那方面は著しく振はざる状況にあり。然れども、南洋印度等に於ては關稅の關係により輸出上不利なる綿布と異なり、關稅問題は平等なる待遇を受け得るために漸次人絹織物により海外輸出を大に發展せんとするの傾向あり。而して其の織物種類は人絹羽二重、人絹縮緬及び壁織、人絹琥珀及び「ポツラン」、人絹縞子、其の他人絹交織物なり。

第八表 本邦各仕向地別人絹織物輸出高

(双入絹綿交織物其の他を含む) 帝國人絹株式會社調査

期年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
支那	二二五、四四〇	六〇〇、五三八	二、六七六、六九九
蘭東	一九六、八〇七	三、五六八、七七四	七、八〇八、四
香港	二、五五七、五〇三	五、九三三、一七九	五、七五五、九三七
比律賓	二、四二八、八〇一	五、三二七、四七二	一、一四〇、五九〇
海峽殖民地	一、一七七、四四四	六、九六五、三〇八	一〇、四九七、四二五

佛印	一五、三二九	八、四三三、一	七、七二、五一
蘭印	七四七、二九四	六、四八六、八二七	一、九二六、三三〇
英印	一、八四四、四一四	一、二六六、一〇五	二、四七九、一七五
暹羅	五三、七二六	九、七九三、四四五	二、三三七、六八八
布哇	—	一八、八三八	一〇、八七〇、〇
北米	—	二六、八九一	七、一七五、四
加奈陀	—	八五、七二二	二、三二七、〇〇六
其他	八七、五三三	六、二六六、四四九	四、四九二、八〇八
合計	一三、〇三〇、五七〇	四、七五一、七九七	八、四二〇、九四九
償付	八、三三八、五三九	二、七六三、三四四	三、一八五、七五九

以上は横濱、神戸、大阪、名古屋、四港の各税關統計に依る別に羽二重の輸出あり。金額を示せば第九表の如し。

第九表 (帝國人絹株式會社調査)

年度	昭和三年	昭和四年	昭和五年
輸出高	四、四六八圓	八、三三三、〇〇七圓	
償付額	二、重	二、重	二、重

昭和四年	一、〇〇三、八五九圓	二八、一六七、二〇三圓
昭和五年	二、〇七、七八九圓	三四九、二九三、八四圓

二、本縣人絹織物生産現況

本縣の人絹織物は主として綿又は毛の交織物にして、總人絹品は僅少なり。即ち綿交織物は尾西及び尾北に南洋及び支那向絹物の製造盛にして近時毛交織の支那向品は増加の傾向にあり、其の他兒服地、コート地等の内地向交織品は三河及び尾州一帯に盛に製織せられ、又縮緬、羽二重類の總人絹織物も昨今名古屋地方に産出し漸次増加の趨勢にあり。蓋し經綳の機械化完成するに於ては白木綿織機を利用して將來大に發達する所あるべし。

茲に最近四年間本縣人絹織物生産額を示せば第十表の如く、尙其の工場數、織機臺數等を示せば第十一表の如し。

第十表 輸出人絹織物及人絹交織物本縣生産數量及價額

組合別	昭和三年	昭和四年	昭和五年
尾西織物同業組合	三四二、六九圓	七三、一七三圓	三三九、二四六圓
三河絹織物同業組合	六九八、八一八圓	一、五六九、六三七圓	三三〇、八三四圓
三州織物同業組合	三、〇三〇圓	一一〇、九一圓	一、五二八圓
合計	九三、八九〇圓	六〇二、九七七圓	二五、九七六圓

組合別	昭和三年	昭和四年	昭和五年
名古屋紡織工業組合	—	—	七五五圓
三河絹織物同業組合	—	—	九〇六圓
三河絹織物同業組合	—	—	一〇〇圓
三河織物同業組合	三九〇、一四八圓	一三三、三四〇圓	一一、二七九圓
尾州絹織物同業組合	—	—	七〇、九九四圓
尾州絹織物同業組合	—	—	三三、七九七圓
東春織物同業組合	—	—	一、四七〇圓
合計	一、八二八、五六一圓	二〇八、三六七二圓	二五八、一七六圓

第十一表 輸出入絹織物及び交織物織機臺數製造戸數及び職工數

組合別	織機臺數	製造戸數	職工數
尾西織物同業組合	一一四	九	八四
三州織物同業組合	二四	二	七五九
名古屋輸出用綿布工業組合	四八	一	四一
合計	一八六	一二	一、六六四



三、縣下に於ける主なる人絹織物及び交織物製造工場

三河織物同業組合	六三	二	四	三	二二	一七三	九	一九四
合計	一四九一	三二	一五	五一	一九	九七四	五二	一〇九三

品名	本縣物産年次	工場建坪	工場設備	工場所在地及製造者名
純人絹紋羽二重	昭和二年	一〇二坪	四巾織機	丹那郡吉野町 儀
人絹入富士絹	昭和元年	三五坪	二巾織機	番栗郡木曾川町 和吉
人絹入絹綿布	昭和元年	四〇坪	二巾織機	中島郡朝日村 辰

(三) 兒服地及ワイシャツ地

一、兒服地及ワイシャツ地概観

近年我國に於ける服飾の様式は著しく洋化せられ、就中輕快安價を要とする小供服、婦人簡單服の流行は愈々顯著となれり。而して是に供し得べき織物品種は極めて多岐にして、晒生地、無地、染生地、捺染物、織込綿等あれども、本調査は毛織及毛交織を除き主として、本縣に産出する織込綿、兒服地、婦人服及之れと織物品種同系なるべきワイシャツ地に就て之を行へ

り。現今此種織物として普及せるは「ヤングム」綿ポプリン、朱子入綿綾格子綿、二重織、變織、箱織等にして原料は綿絲を大部分とし、純絲、人造絹糸を交ふるもの相當多く、絹絲、麻絲を混するもの亦少量存せり。主要生産地は兒服地に於ては愛知、和歌山、静岡、福井等の諸縣ワイシャツ地に於ては愛知、静岡、埼玉、福井、和歌山等の諸縣にして就中本縣は其主位を占む。之が適確なる生産額を知ること困難なれども、恐らく以上數縣の年産一千万ヤール以上、價格四百萬圓餘ならん。

此種織物發達の経路を見るに、歐洲戰亂以後興起し大正の末期に至る間綿ポプリン、「ヤングム」、綾格子等の如く地風の耐久力を主眼とせるもののみ多かりしが、昭和年代に入りては外國趣味の普及の結果二重織の如き變組織品類、「ポイル」の如き強燃絲應用品の生産増加し、人造絹絲の應用目立つに到れり。然れども現在海外品の相當數量輸入せらるゝは一面海外臭味に對する意匠上の要求によるべきも一面本邦に於て猶未だ高級綿布の工業完成せざるに起因するものと見るべく、將來此の種織物の需要激増の兆あるに鑑み相當助長の要あらんか。

商工省の調査に依れば昭和五年度輸入綿布總額は五百萬圓にして前年度の八百五十萬圓に比し著減せるも該輸入に於て兒服地、婦人服地及ワイシャツ地が相當重要な部分を占むるは着目に値す。

兒服地の輸出は横濱商工會議所の調査に依れば昭和五年度既製服二千打、此の工賃一萬五千圓ワイシャツ輸出三萬三千打、此の金額八十五萬圓を示し、此の數字のみを以て必しも大量と稱

すべからざるも、現今我國より海外に輸出せらるる各種棉布は海外各需要地の風習に應じ、殆ど總ての品種に涉り兒服地、婦人服、若くはワイシャツ地に使用せらるる部分は蓋し大なるべし。

二、本縣下に於ける斯業の狀況  
本縣の兒服地、ワイシャツ地の生産額は左の如し。

年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
数量	五、三〇〇、〇〇〇ヤード	七、三〇〇、〇〇〇ヤード	七、〇〇〇、〇〇〇ヤード
價格	一、〇〇〇、〇〇〇圓	一、一〇〇、〇〇〇圓	一、五〇〇、〇〇〇圓

品種は前記織物の各種に涉ると雖も春着及び夏物に多く、冬物の生産は僅少なり。従つて製造者は冬物生産の時は毛織物、若くは他の輸出棉布の製織に従事するものあり。又毛織物主體の業者にして毛織物時季以外の季節に兒服地の製織をなすもの亦多し。従つて一年を通じ完全に斯業のみに従事するものは比較的僅少なり。

次に此種織物經營上の特徴を述べんに當り流行に伴ふ柄行の變化に應ずる事の必要なる性質上織機はドビー機若くは杆特装置を附随せしむる場合多く、爲めに是が運用上特殊の技術を要し又柄柄の組織に伴ふ色絲取扱上作業多岐に亘り經營上細微の注意を要し、一般大企業の經營に適せず、一面能率増進上不便あるも單一作業に依る高能率經營者の壓迫を受ける處少きは有利となす。

終りに本業將來發達に資すべき要件と考へられるは、特殊滑手綿絲の紡績、織物、整理加工の機關を發達せしめ、是と圖購を保ち一層製織技術を練磨し粗製を戒め、併せて海外織物の研究に着眼するにあり。

三、縣下に於ける主なる兒服地及ワイシャツ地製造工場

品目	本織物開始年次	工場建坪	工場設備	工場所在地及製造者名
兒服地	大正八年	二〇〇坪	二市ドビー付織機 七八臺	實業部蒲郡町 鈴木合名會社
ワイシャツ地	昭和二年	二二〇坪	二市ドビー付織機 五六臺	實業部三谷町 喜助
同	大正八年	一六〇坪	二市織機 四〇臺	實業部蒲郡町 藤治
同	大正十五年	一〇〇坪	二市ドビー付織機 三三臺	實業部三谷町 竹内善之助
同	大正十三年	三五〇坪	二市織機 一〇六臺	丹羽郡市袋町 株式会社 山茂杉木商店
同	大正十五年	二二〇坪	二市織機 四二臺	業部大北方村 橋本俊郎
同	大正八年	一七〇坪	二市織機 四四臺	中島郡奥町 武衛

參 考

第一回推獎優良品目及其製造業者

〔一〕機械工業之部

- |     |   |                     |                                   |
|-----|---|---------------------|-----------------------------------|
| (一) | 自轉車   | 名古屋市中區御器所町          | 株式會社 岡本 自轉車製作所                    |
| (二) | 完成自轉車及部品<br>工作機械                            | 名古屋市中區有地町           | 株式會社 大隈鐵工所                        |
| (三) | 一般工作用諸機械<br>飛行機全體及發動機<br>飛行機全體及發動機<br>飛行機全體 | 名古屋市中區大江町<br>同 南區船方 | 三菱航空機株式會社<br>名古屋製作所<br>愛知時計電機株式會社 |
| (四) | 紡織機械<br>木綿紡績機械<br>自動織機                      | 名古屋市西區島崎町<br>碧海郡刈谷町 | 豐田式織機株式會社<br>株式會社 豐田自動織機製作所       |
| (五) | 電氣機械  |                     |                                   |

〔二〕化學工業之部

- |     |                                   |                                    |  |
|-----|-----------------------------------|------------------------------------|--|
| (六) | 車<br>機關車、客貨車、電車                   | 同 南區熱田東町                           | 日本車輛製造株式會社                                       |
| (一) | 小形電動機及電熱機<br>變壓機<br>陶磁器上繪燒附電氣爐    | 名古屋市東區矢田町<br>同 東區高岳町<br>同 東區主税町    | 三菱電機株式會社<br>名古屋製作所<br>株式會社 高岳製作所<br>株式會社 中部電機製作所 |
| (二) | トマトソース及ケチャップ<br>塗カゴメ印<br>ウオスターソース | 知多郡橫須賀町<br>知多郡上野村                  | 泰食品工業所<br>愛知トマト製造株式會社                            |
| (三) | 桃太郎印<br>群島印<br>陶磁器上繪附用水金液         | 知多郡上野村<br>同 西春日井郡枇杷島町<br>名古屋市中區小林町 | 愛知トマト製造株式會社<br>中央食品株式會社<br>兒島豐三郎<br>日本金液株式會社     |

〔三〕 染織工業之部

(一) 毛糸及四幅毛織物

紋メルトン、子供服地	名古屋市東區千種町	尾關毛織株式會社
ドレスキン、コルズボン地	中區葛村町	野々垣市太郎
ボーラ、メルトン	東區杉村町	伏原毛織合資會社
背廣服地	西區西志賀町	御幸毛織株式會社
クレパネット、サージ類	一宮市公園東	長谷川毛織株式會社
メルトン類	同 四ツ谷町	森菊次郎
クレパネット、サージ類	中島郡起町	山本直右工門
背廣服地	同	鈴善合名會社
子供服地、サージ類	同	鈴木鎌次郎
紋織服地	同 稻澤町	鈴木正善
サージ類	同 同	會社水谷毛織工場
背廣服地	同 同	瀧本與兵衛
サージ類	同 大津島町	中野太一郎
二重サージ	海部郡津島町	大橋毛織合資會社

〔一〕 機械工業之部

(七) 時計

第二回推奨優良品目及其の製造業者

サージ類	同	片岡毛織株式會社
ドレスキン、サージ類	同	見玉毛織合名會社
サージ類	知多郡魚崎町	竹内昇龜
毛織糸、編糸	名古屋市西區岩塚町	日本毛織株式會社
毛織糸、編糸、背廣服地、オーバー地	同 東區下飯田町	東京モスリオン紡織株式會社
		名古屋工場

所	在
名古屋市南區瑞穂町離道	愛知時計株式會社
同 中區三田町	高野時計製造所
同 同	高野金屬品製作所
同 中區東陽町	明治時計製造合資會社
同 東區葵町	尾張時計株式會社

工場名
愛知時計株式會社
高野時計製造所
高野金屬品製作所
明治時計製造合資會社
尾張時計株式會社





幡豆郡西尾町  
 名古屋市西區裁下町  
 知多郡岡田町  
 岡崎市明大寺町  
 名古屋市西區傳馬町  
 同 西區押切町  
 同 西區上名古屋町  
 同 西區下園町  
 同 南區八熊町  
 幡豆郡西尾町  
 知多郡東浦村  
 知多郡龜崎町  
 岡崎市柱町  
 西春日井郡庄内村  
 名古屋市中區御器所町  
 知多郡龜崎町  
 名古屋市中區廣路町

西三織布株式會社  
 豐田 佐助  
 安藤 壽吉  
 千賀合名會社  
 宮本物産合名會社  
 豐田紡織株式會社押切工場  
 帝國燃糸織物株式會社  
 宮田 義忠  
 名古屋紡績株式會社  
 合名會社 鈴木商會  
 岡 戸 嘉七  
 合資會社 山田商店  
 三河織産株式會社  
 菱文織物株式會社  
 山 田 利吉  
 石 川 藤八  
 株式會社三綿商店

同 西區傳馬町  
 中島郡起町  
 寶飯郡蒲郡町  
 名古屋市西區志賀町  
 加 工 業 者  
 名古屋市東區杉村町  
 同 東區千種町  
 同 西區露橋町  
 東區上飯田町

(三) 輸 出 メ リ ャ ス  
 名古屋市西區泥江町  
 名古屋市南區熱田中瀬町  
 名古屋市西區免王町

合名會社 杉本商店  
 愛知織布株式會社  
 舞田織布合資會社  
 名古屋別珍株式會社  
 堀尾染布工業所  
 株式會社愛知物産組  
 增 田 染 工 場  
 中央染布工業所  
 伊藤メリヤス株式會社  
 合名會社 齋村商會  
 村岡メリヤス製造所

第三回推獎優良品目及其の製造業者

[一] 機械工業之部

(八) 製材及製函

名古屋市南區千年町  
南區西古渡町  
南區熱田白鳥町  
南區古渡町

千年製材株式會社  
合名會社加周商店  
加周商店白鳥工場  
山岸製材株式會社

[二] 化學工業之部

(五) 硝子

名古屋市中區御器所町江越拾四番地  
南區熱田東町宇浮島七〇番地  
東區東二葉町拾二番地  
東區千種町豐前二三四番地  
東區千種町豐前二二六番地

石塚製硝子製造所  
株式會社名古屋硝子製造所  
中央玻璃製作所  
箕浦硝子製造所  
替我硝子製造所

(六) タイル及テラコッタ

名古屋市東區千種町時月一三三番地  
中區廣野町字村北四七番地  
東區山田西町三丁目一〇六番地  
愛知縣橋豆郡平坂町  
愛知縣知多郡常滑町字堀間〇五番地  
常滑町土御野毛三六番地  
武豐町  
尾崎村大字多屋字郷下一二〇番地  
同 常滑町字堀間四七番地ノ一  
同 瀨戸市大字瀨戸七二七番地  
同 大字瀨戸三一七五番地  
同 大字瀨戸二六七二番地

株式會社名古屋製陶所登月工場  
不二見燒合資會社工場  
佐治タイル合資會社工場  
大阪窯業株式會社平坂工場  
伊奈製陶株式會社建築陶器工場  
日本陶業株式會社常滑工場  
日本陶業株式會社武豐工場  
株式會社大正製陶所  
④ 杉江製陶所  
加藤吉兵衛工場  
瀨戸陶器合資會社  
山茶窯製陶所

[三] 染織工業之部

(四) 綿絲、絹紡績絲及人造絹絲

名古屋市中區下廣井町三ノ一五 東洋紡績株式會社愛知工場  
 同 中區正木町三一四 名古屋工場  
 同 南區熱田尾頭町一五 尾張工場  
 愛知縣海部郡佐織村大字町方新田 津島工場  
 同 知多郡半田町山方新田三三 知多工場  
 一宮市大字一宮天道東一番地 大日本紡績株式會社一宮工場  
 愛知縣西春日井郡西枇杷島町大字下小田井 富士瓦礫紡績株式會社  
 字子新田一番地 名古屋工場  
 名古屋市南區豐田町字道徳二九二三番地 日清紡績株式會社名古屋工場  
 岡崎市針崎町 同 岡崎工場  
 名古屋市東區千種町高見三十五番地 愛知織物株式會社千種工場  
 同 市東區琴代官町十四番地 同 代官町工場  
 同 市西區榮生町字米田一七一六番地 豐田紡績株式會社  
 愛知縣碧瀨郡刈谷町大字刈谷字岡留池一番地 豐田紡績株式會社刈谷工場  
 名古屋市中區米野町字嶺ヶ島二九番地 菊井紡績株式會社  
 同 市西區押切町字下菴原一番地 豐田押切紡績株式會社

(五) 燃

燃

糸

名古屋市西區上名古屋町 株式會社服部商店熱田工場  
 名古屋市中區松島町 同 內外紡績株式會社  
 愛知縣一宮市大字一宮 帝國燃絲織物株式會社  
 愛知縣一宮市八幡町 同 東洋紡績株式會社  
 同 市東區上飯田町一〇〇番地 大會根絹紡工場  
 帝國燃糸織物株式會社  
 東洋燃糸株式會社  
 森林燃糸工場  
 糸慶意匠燃糸工場



## 愛知國產振興會規約

- 第一條 本會ハ愛知國產振興會ト稱ス  
第二條 本會ハ事務所ヲ愛知縣盛岡工区内ニ設ケル  
第三條 本會ハ國產振興ニ關スル施設ヲ爲スルヲ目的トス  
第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メノ事務ヲ行フ  
一、國產品ノ改善普及ニ關スル調査及研究  
二、産業制度ノ改善ニ關スル調査及研究  
三、國產品ノ銷售會、展覽會、品評會、見本市等ノ開催  
四、國產振興ニスル講演及印刷物ノ刊行  
五、其他本會ノ目的達成ニ必要ナル事項  
第五條 本會ハ團體又ハ個人ニシテ本會ノ目的ニ賛同スルモノヲ以テ組織ス  
第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會 長	一 名
副 會 長	二 名
理 事	若干名
幹 事	若干名

- 第七條 本會ニ顧問ヲ置クコトヲ得、顧問ハ會長之ヲ囑託ス  
會長ハ愛知縣知事ヲ推薦シ、副會長ハ名古屋市長及名古屋商工會議所會頭ニ依リ囑託ス

- 第八條 理事及幹事ハ會員及學識經驗アルモノノ中ヨリ會長之ヲ囑託ス  
第九條 本會ニ役員會ヲ置キ會務ノ執行上必要ナル事項ヲ議決ス、役員會ハ必要ニ應ジ會長之ヲ召集ス  
第十條 幹事ハ會長ノ指揮ヲ承テ會務ヲ處理ス  
第十一條 本會ニ委員若干名ヲ置キ、委員ハ役員會ノ意見ヲ聽シ會長之ヲ選任ス  
第十二條 本會ニ書記ヲ置キ事務ヲ得、書記ハ上司ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ從事ス  
第十三條 本會ノ經費ハ會費及寄附金、其他ノ收入ヲ以テ之ニ充テ會費ハ年額金五圓トス  
第十四條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始メテ翌年三月三十一日ニ終ル

大正十五年八月

## 愛知國產振興會

愛知國產振興會役員 (順序不同)

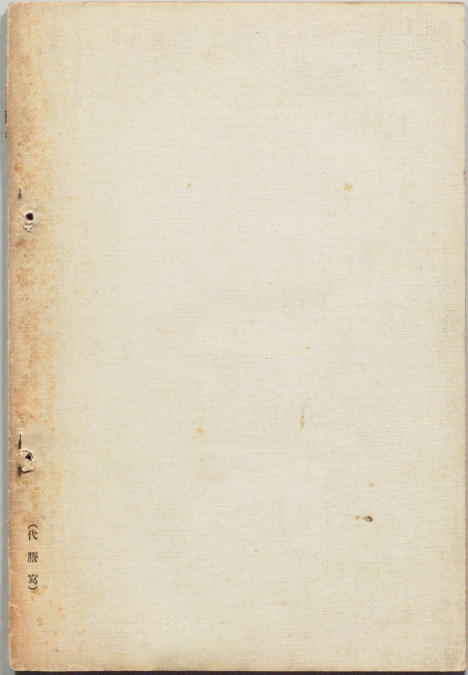
會 長 尾崎 勇次郎  
 副 會 長 伊藤 次郎  
 名古屋 市 長 伊藤 俊太郎  
 愛知 縣 內 務 部 長 伊藤 俊太郎  
 名古屋 市 助 役 伊藤 俊太郎  
 名古屋 市 助 役 伊藤 俊太郎  
 登 橋 市 助 役 伊藤 俊太郎  
 岡 崎 市 助 役 伊藤 俊太郎  
 一 宮 市 助 役 伊藤 俊太郎  
 名古屋 商 工 會 議 所 副 會 長 小島 太左衛門  
 登 橋 商 工 會 議 所 會 頭 神 野 三郎  
 岡 崎 商 工 會 議 所 會 頭 神 野 三郎  
 一 宮 商 工 會 議 所 會 頭 神 野 三郎  
 知 多 商 工 會 議 所 會 頭 神 野 三郎  
 愛知 縣 警 署 同 業 組 合 聯 合 會 組 長 小島 太左衛門  
 名古屋 工 業 研 究 會 長 青木 謙太郎  
 名古屋 實 業 協 會 會 長 加藤 勝太郎

常務幹事

愛知 縣 能 率 研 究 會 副 會 長 大 限 榮一  
 名古屋 商 業 研 究 會 副 會 長 高 松 定一  
 愛知 實 業 組 合 聯 合 會 長 岡 谷 聖助  
 工 政 會 東 海 支 部 長 杉 山 榮助  
 名古屋 機 械 談 話 會 幹 事 長 伊 藤 萬太郎  
 名古屋 工 商 會 委 員 長 北 澤 忠勇  
 名古屋 選 修 局 長 平 井 宣太郎  
 名古屋 稅 務 監 督 局 長 西 森 鐵太郎  
 名古屋 地 方 專 賣 局 長 川 上 義弘  
 陸 軍 監 兵 廠 名古屋 工 廠 長 森 上 義弘  
 名古屋 高 等 工 業 學 校 長 森 上 義弘  
 名古屋 高 等 商 業 學 校 長 渡 邊 龍彦  
 大 日 本 織 物 協 會 理 事 長 神 野 金之助  
 愛知 縣 商 工 課 長 橋 田 才一  
 愛知 縣 商 品 陳 列 所 長 菅 原 英三郎  
 登 橋 市 助 役 鈴木 健次郎  
 岡 崎 市 助 役 前 島 宗治郎

名古屋市産業部長  
愛知縣工業試驗場長  
名古屋商工會議所理事  
豐橋商工會議所理事  
岡崎商工會議所理事  
一宮商工會議所理事  
知多商工會議所理事  
工政會東海支部幹事長

近 朝 三  
比 奈 博  
藤 見 十  
江 口 編 一 郎  
森 尾 繁 一  
稻 葉 恒 春  
鈴 木 恒 助  
鈴 木 恒 助  
朝 比 奈 見 十



不  
寫